アトリエ訪問

第8回

横尾忠則

美術家

約束の時間に，横尾忠則は自転車に乗って現れた。
赤いマフラーに顔をうずめ，
「自宅はここから近いんですよ」と話しながら，
やさしくアトリエへ招き入れてくれた。

撮影 永野雅子

壁いっぱいの大きな窓を開けると，小鳥のさえずりが聞こえる。広いベランダは緑樹に囲まれ，まるで森の中にいるようだ。思わず，ここが東京であることを忘れてしまう。

――気持ちのいいアトリエですね。

横尾　窓を開けっ放しにしていると，鳥が入ってきたりしますよ。ベランダでは，本を読んだり，ちょっとしたアイデアを考えたりします。

ここは，建築家の磯崎新（いそざきあらた）さんにつくってもらったんです。磯崎さんは，昔から親しくしているし，アトリエというものをよくわかっていらっしゃる方だから，僕のほうから「ここはこうしてほしい」と説明したり，何か注文したりすることはありませんでした。アトリエっていうのはね，何もないほうがいいんです。建築的な見せ場をつくってしまうと，使い勝手が悪くなってしまう。だから，ここは，磯崎さんの「箱」の作品です。

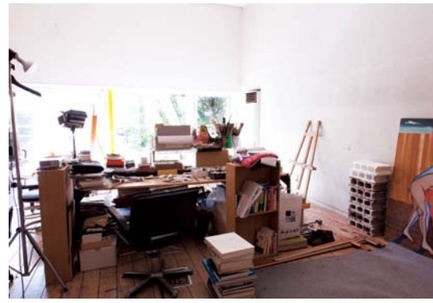
実は最近，改築したんですよ。年を取るごとに，もっと太陽光線を浴びたいと思うようになって，壁を取っ払って窓を広くしました。そして，天井が高くて寒かったので，低くしました。今の自分の肉体に合わせた空間に変更してもらったんです。

――CDがたくさんありますが，音楽を聴きながら制作されるんですか。

横尾　昔は，音楽がないと絵が描けないくらいだったんですが，最近，耳鳴りと難聴がすごいんです。耳の中で蝉がジーッと鳴いていたり，圧迫感があったり，そんな感じです。だから，今は音楽をかけることが億劫になっています。音楽が雑音にしか聴こえない。

実は，30年ぐらい前からよく耳の

アクリル絵の具を使うときは,紙皿をパレット代わりにしている。



大きな窓から光がたくさん差し込む。ライトをつけなくても,室内は明るい。

NYの個展のため,作品は出払っている状態。「そろそろ次の絵に取りかかりたい」と横尾さん。

「やっぱり,絵は肉体で描かなきゃ」

絵を描いていたんですよ。こうなることを無意識に感じていたのかな。

――耳鳴りによって,作品に変化が生まれたりするんでしょうか。

横尾　ははは。耳の不自由さが,絵の自由さにつながってくれたらいいですけどね。耳もそうだけど,身体の調子と創作活動は分けて考えられないと思います。よく絵を観念的に捉える人がいますが,絵は肉体的なものです。「自分はこういう考えに基づいて,こういう絵を描きました」と説明をするアーティストがいるけれど,それなら描かなくていいんじゃないかと思います。逆に,自分が何を考えているかわからないから描くんだと。描いてから「あ,自分はこういうことを考えているんだ」ってわかる……そういうものだと思います。やっぱり,絵は肉体で描かなきゃ。

近々,アトリエの地下にピンポン台を入れる予定です。運動不足だから,体力をつけるために（笑）。

次の作品は,あの大きなキャンヴァス（縦２ｍほどの画布を指して）に描いてみようと思っています。今の自分の体力で描けるのかどうか,試すためにもね。

――作品,とても楽しみにしています。最後に,美術の先生方にメッセージをお願いできますか。

横尾　僕は「自由に生きること」がいちばん大事だと思っています。だから,子どもたちには,絵で自由な感覚を身につけてほしいと思います。とにかく自分の思いの丈を画面に吐き出してみてほしい。それと,絵は知識や教養のためにあるわけではないから,評価は後回しでいい。モネとマネの区別がつかなくたっていいんです。そういうことを,先生が言葉だけでなく,身体を使って教えていくことが必要だと思います。

何かのために絵を描くとか,何かのために絵を見るんじゃない。そういう大義名分があってはいけないんです。もっと自分の身体を感じて,信じて。そして,自由に。そんなふうに思います。

よこお・ただのり

1936年兵庫県生まれ。美術家。
ニューヨーク近代美術館,ステデリック美術館など内外の美術館で個展を開催。
パリ,ベネチア,サンパウロなどのビエンナーレに出品。
小説『ぶるうらんど』では泉鏡花文学賞受賞。
2012年,神戸市に横尾忠則現代美術館,
13年,瀬戸内海の豊島に豊島横尾館が開館。
毎日芸術賞,紫綬褒章,旭日小綬章,
朝日賞など受賞多数。
15年9月には,高松宮殿下記念
世界文化賞を受賞した。